□ 覧 男女共同参画

H27 9/24 (木)

□ あ谷たはどうしたい? 大学生・湖新樂交流会と考える 家族・地域とのつなかり

【コーディネーター】 静大生 ☆地域とつなか川際 (静向大学教育学科学生チーム) 【サポーター】 池田恵子先生/ヤマモト・ルシア先生

時間: 13 時 30 分~15 時 00 分 場所:北部多目的センター 講座室















平成27年度 静岡大学地域連携応援プロジェ





目 次

◆ 巻	頻言	静岡大学地域連携応援プロジェクトについて ――――――――――――――――――――――――――――――――――――	- 2
	βī	可部 耕也 イノベーション社会連携推進機構 地域連携生涯学習部門長	
4	成 27	7 年度静岡大学地域連携応援プロジェクト 成果報告	
1.		市における多様性に配慮した地域づくりのための地域女性団体サポート事業 ————— 〈代表者〉池田 恵子 教育学部 教授	— 3
2.	大学と	と保護者と親の会の連携による発達障害児への学習等支援活動「きんもくせい土曜教室」―― 〈代表者〉大塚 玲 教育学部 教授	- 5
3.		自然と、世界とふれあう「しきじ土曜倶楽部」支援プロジェクト ————————————————————————————————————	- 7
4.	デザィ	インによる地域活性化プロジェクト - 焼津市 笑顔でつなぐポスター展	— 11
5.		や体験活動を通して学びに熱中する子ども育成の場「ちびっこ寺子屋」プロジェクト ――― 〈代表者〉後藤 友香理 教育学部 助教	— 13
6.	静岡市	市東豊田学区における雑紙回収率アップ事業	— 16
7.	学生と	と地域社会の協働による地域防災力向上プロジェクト ————————————————————————————————————	— 18
8.		ボランティアによる「<つながりづくり>実践事例集」の開発 〜学校・地域における多文化共生理念の共有化を目指して〜 ――――――――――――――――――――――――――――――――――――	-20
9.	浜松市	市における地域文化の情報発信のための「浜松鈴鈴(りんりん)」発行事業 〈代表者〉杉山 岳弘 情報学部 教授	-23
10.		県西部地域の農業活性化に向けたサポート事業 ————————————————————————————————————	- 25

頭

静岡大学地域連携応援プロジェクトについて

阿部 耕也 | イノベーション社会連携推進機構 地域連携生涯学習部門長

静岡大学は、『自由啓発・未来創成』のビジョンを掲げ、 「質の高い教育と創造的な研究を推進し、社会と連携し、と もに歩む存在感のある大学」を目指して、教育・研究・社 会連携の三つを大きな使命としています。なかでも社会連 携に関しては、「地域社会とともに歩み、社会が直面する諸 問題に真剣に取り組み、文化と科学の発信基地として、社 会に貢献する」ことを使命としており、平成24年度に地 域連携と産学連携に携わる組織を統合し、イノベーション 社会連携推進機構を設置しました。

学内において、地域連携活動の窓口となる組織を設置す る前から、すでに本学の学生・教職員はさまざまな地域連 携活動に携わっていますが、それらの活動は必ずしも学内 外の皆様には知られておらず、また活動に際していろいろ な困難を抱えているのが実情です。そこで、平成23年度 にイノベーション社会連携推進機構の前身である地域連携 協働センターが、「地域連携応援プロジェクト」を企画し、 「本学の学生・教職員が主体となり、地域の人々や団体、自 治体等と協働で取り組んでいる又は新たに取り組もうとす る地域活性化につながる活動」への支援を学内で公募、採



平成 27 年度プロジェクト募集のポスター

択しました。初年度以降も継続して公募を行い、これまでの支援実績は下表のとおりです。

各プロジェクトチームは、学外の方々と連携しながら着実な活動を展開し、有益な成果が得られており、そ の成果は学内外に高い評価を受けております。ここに平成27年度の成果をまとめて「地域連携応援プロジェ クト成果報告書」を発行いたします。

平成 25 年度からは新たな展開として、これまで大学との接点がない地域から広く課題を公募する「地域課 題解決支援プロジェクト」を立ち上げました。最終的に提案された 27 課題についてヒアリングを行い、学内 外の支援を得た新たな地域連携・貢献活動を展開中です。

本成果報告書をご覧いただき、本学には学生・教職員の携わる多様な地域連携活動があることを地域の方々 に広く知っていただき、あわせて学生・教職員には今後それらの活動に加わったり、あるいは新たな地域連携 活動を始めたりするきっかけとしていただければ有り難く存じます。

年度	応募	採択	学内他部局に付託 (依頼先)	予算措置
H24	18 件	11 件	3件(学生支援センター)	150 万円
H25	14 件	12 件	0 件	180 万円
H26	16 件	13 件	0 件	180 万円
H27	16 件	11 件	0 件	105 万円

地域連携応援プロジェクト 過去 4 年の応募・採択状況

湖西市における多様性に配慮した地域づくりのための 地域女性団体サポート事業

静大生☆地域とつながり隊 池田恵子| 教育学部教授 ヤマモト・ルシア・エミコ| 教育学部准教授

1. 事業の目的と組織

静岡県湖西市は、男女共同参画推進プランや多文化 共生プランの実施などを通して、性別や国籍・文化的 な背景に配慮し、人権が尊重される地域づくりに取り 組んできました。なかでも、市内で活動する女性団体 の連絡会で、海外にルーツを持つ女性も多く参加して いる湖新楽交流会は、行政と協力して活発に活動して きました。その一環として、地域交流セミナーを活用 し、地域住民と共に男女共同参画や多文化共生につい て考える機会を持ってきました。

湖新楽交流会のような男女共同参画や多文化共生の 地域づくりをめざす市民活動団体は、今後の地域社会 において、多様性に配慮し、人権を尊重した地域づく りが定着し、男女共同参画や多文化共生の施策が実際 に成果を出していくために、重要な役割を果たします。

本事業では、湖西市の平成27年度地域交流セミナー全4回のうち2回の企画と実施を、湖新楽交流会、湖西市役所、静岡大学の教員・学生チームが共同して行いました。協働作業を通して、大学生は、地域における多様性配慮の課題について学ぶことができます。一方、湖新楽交流会にとっては、大学生と共に新鮮な発想の地域セミナーを企画、実施することにより、地域の人々の多様性への配慮に対する関心を高めやすくすることが目的です。事業実施組織は、湖西市企画部市民協働課男女参画・市民活動推進係、湖新楽交流会、池田恵子とヤマモト・ルシア・エミコ(静岡大学教育



おしゃべり会の様子 (2015年8月7日)



第2回地域交流セミナーのチラシ

学部)、静大生☆地域と つながり隊(横畠あか ね、藁科梨江、鈴木颯太、 岩渕真理奈:教育学部 生涯教育課程国際理解 教育専攻3年、小島菜 那子、千代光愛、大森 マリア、齊藤りん:同4 年)により構成されま した。

2. 事業の経過

地域交流セミナーの企画に際して、静大生☆地域とつながり隊と教員が、湖新楽交流会、地域の女性グループや外国にルーツを持つ市民と「おしゃべり会」を行い、地域の男女共同参画や多文化共生に関わる課題とニーズを把握しました。その結果を反映させる形で、地域交流セミナーの企画を学生チームが考案し、湖新楽交流会が助言しつつ共同で確定し、共同で実施しました。その際、課題発掘や解決策の検討に効果が高い住民参加型ワークショップ手法を学生チームが導入しました。

<平成27年度 湖西市地域交流セミナー> 第1回(新居地域センター、2015年7月16日) 「その時どうする!? 命・健康・人権を守る避難所 運営」(担当:池田)

第2回(北部多目的センター、2015年9月24日) 「あなたはどうしたい!? 大学生・湖新楽交流会と 考える家族・地域とのつながり」

(担当:静大生☆ 地域とつながり隊、

および湖新 楽交流会)

第3回(西部公民館、2015年10月29日) 「大学生・湖新楽交流会と考える『あなた』と『わたし』 の地イキ、イキイキ生活!」(担当:静大生☆地域とつながり隊、および湖新楽交流会) 第4回(南部構造改善センター、2016年1月21日 (南部)「大学生・湖新楽交流会と地域の問題を一緒 に考えよう!!」(担当:ヤマモト)

3. 第2回、3回地域交流セミナー

静大生☆地域とつながり隊と湖新楽交流会の共同企 画による地域セミナーでは、2回目に男女共同参画を、 3回目に多文化共生をテーマに企画を行いました。「お しゃべり会」の結果、2回目には、とりわけ、「地域 でのつながりづくり」「家族」「ワークライフバランス」 「ポジティブライフスタイル」をキーワードに、静大 生☆地域とつながり隊オリジナルの寸劇を通して、社 会の抱える問題や地域・家族について参加者がディス カッションを行いました。寸劇は、①家族ばらばらの 食事や、②介護の負担・介護される人の気持ちと地域 のつながり、③性別役割分担とワークライフバラン スの三場面で構成されました。終了時に実施されたア ンケートでは、「身近なテーマですごく参考になるこ とばかりだった。普段じっくり考える時間が無かった り、家族には話しても他の人の意見を聞く機会は全く 無かったりするので、違った視点からの意見をたくさ ん聞けて勉強になった。」、「劇が分かりやすくてよかっ た。」という感想がありました。

第3回目は、「多文化共生」「ルールと習慣」「生き生きとした生活」「ポジティブライフスタイル」をテーマに、湖西市、特に外国にルーツを持つ市民が多い西部地域における多文化共生のあり方を考えました。まず市や県の調査をもとにデータから考え、次に事例(セリフのみの寸劇)を読むことによって、実際の問題に当事者として向き合ってみる活動を行いました。



第2回 地域交流セミナーの寸劇

事例① 外国人家族が引っ越して来てから、回覧板が回ってくるのが遅くなり、回覧板の内容である避難訓練にもその外国人家族は姿を見せなかった。 事例② ゴミ捨て場に資源ごみの日でないにもかかわらず空きびんが散乱していた。日本人の新住民 A さんと古くから住んでいる B さんの会話。 A さんはそれを最近外国から引っ越してきた X さんの仕業と判断、B さんはすべての原因を外国出身の X さんにすることに対して懐疑的な主張をする。



第3回 地域交流セミナー

4. 成果と課題、今後の取組

セミナーの方向性を考えていた当初、静大生☆地域とつながり隊の学生にとって、セミナーは、「来ていただく方々に何か知識や情報を提供しなければいけない」ものだという意識が強くありました。そのためにどうすればいいのかを考えていましたが、徐々に、地域の課題は、湖西市に限った課題ではなく、地域というよりも自分たち自身の課題なのだと考えるようになっていきました。一方、湖新楽交流会の参加者は、住民参加型ワークショップ手法によるセミナーづくりを初めて経験し、意見を言いやすくする手法が新鮮だったそうです。一見敬遠しがちで、どうにもならないとあきらめがちな問題も、寸劇や事例を通して考えることで、とても身近で考えやすいものとなることが実感されたようでした。

このセミナーに参加していただいたのは、多文化共生や男女共同参画などの社会問題に元々関心が高い人だったと予想されるため、そうでない人々の関心をいかに高めていくかが課題として認識されました。この事業の終了後、多様性に配慮した地域づくりをどのように継続していけばよいか、考え続けていける場が必要だと感じました。

大学と保護者と親の会の連携による発達障害児への学習等支援活動 「きんもくせい土曜教室」

大塚 玲 | 教育学部教授 角田 奈々、辻村 かんな、佐藤 眞美、高津 紗季 | 教育学部特別支援教育専攻4年

1. 活動の目的

「きんもくせい土曜教室」は、「静岡県LD等発達障がい児・者親の会きんもくせい」、発達障害のある小学生の保護者、教育学部教員(大塚)と学生ボランティア(特別支援教育専攻学生)が連携して実施している発達障害児への学習等支援活動です。この活動は、平成11年に開始し、今年度で17年目を迎えました。

「きんもくせい土曜教室」は、以下の3つの目的の もとに活動しています。

- ①発達障害のある小学生に対して個別の学習指導と小 集団でのソーシャルスキルを学ぶ場を提供すると共 に、子どもたち同士の交流を図る。
- ②特別支援教育を学ぶ学生に対して臨床的指導及び実践的研究の機会を提供し、専門知識と実践的技能を有する専門家の養成に貢献する。
- ③発達障害のある子どもをもつ保護者同士の交流の場を提供し、専門家とのネットワークを広げ、こうした子どもたちの理解や支援の輪を広げる。

2. 活動の概要

本年度の参加者は、発達障害のある小学生 10 名(5年生 5 名、4年生 2 名、3年生 1 名、2年生 2 名)とその保護者 10 名、学生ボランティア 18 名(教育学部 4年生 8 名、3年生 7 名、2年生 3 名)、スーパーバイザー 3 名(研究室の卒業生で、特別支援学校教員 2 名、大学院生 1 名)、そして運営責任者の大学教員(大塚)です。



学習の様子

活動内容は、毎月2回、土曜日の午前中に行われる、個別の学習指導と小集団活動です。今年度の活動は、平成27年4月25日(土)~平成28年2月13日(土)の間に計16回行いました。通常の活動に加え、クリスマス会など一年に3回お楽しみイベントも行いました。



小集団活動(ジャンケン列車)の様子

3. 個別の学習支援

個別の学習支援では、子ども1名につき学生1または2名が学習指導を行います。学生は子どものペースや、認知特性に応じて教材を作り、一人一人にあった学習を行えるよう努力しています。以下にその一例を紹介します。

漢字の学習が苦手なAさんに対して行った指導では、学習意欲を高めるために書字を最小限にし、漢字の構成要素に色を塗る活動や、構成要素ごとに分解した「漢字パズル」を作成し、漢字の練習をしました。1回の指導では、①白抜きになっている1文字の漢字の中から知っている漢字や片仮名を見つけて色を塗ってもらう、②完成したカードを見ながら漢字を書き写す(①②を10文字分行う)、③学習した10文字の漢字テストを行う、④間違えた漢字は漢字カードを見直して復習する、ということを行いました。この指導により、書けなかった漢字から選んだ50字のうち半数以上が書けるようになりました。

また、今年度はこれまでとは違った新しい取り組みに挑戦しました。それは、iPadを使用した学習です。

書字が苦手なBさんに対して、漢字やひらがなのアプリを使用したことで、意欲的に学習に取り組むことができました。また、指導中に出てきた知らない単語や



子どもの疑問をその場ですぐに解決できる大きうになったことも大きな変化です。 学習だけで使うのではなく、姿勢を録画して見せることで、姿勢に気をつけるよう促すこともできました。

物の名前をすぐに調べることができるため、

iPad を使用して漢字を学習している様子

4. 小集団活動

小集団活動は、学年や男女構成、行動や認知の特徴 等を考慮し、5名ずつの2グループに分けて実施しま した。

小集団活動では、友達と協力することが必要とされるゲームを行います。その中で、他人と関わることの楽しさを経験してもらいたいと考えています。そのうえで、話の聴き方や、意見の伝え方、話し合いの仕方といったソーシャルスキルやコミュニケーションスキルを身につけるための活動を行います。

今年度は、小集団活動の中で合意形成の指導も行いました。合意形成とは、話し合いを通して意見の一致を図ることです。話し合いの内容は、「次回の活動で行うゲームを決める」ことです。話し合いを通して、

- ①子ども達が興味を持つと考えられる題材を設定し 意欲を持たせる、
- ②話し合いの手順を明確にし、話し合いの型がわか るようにする、
- ③理由もつけて意見を言う、
- ④対立・葛藤場面における「じゃんけん」や「多数 決」といった対処法を使えるようにする、
- ⑤感情のコントロール方法を紹介し、意見が通らなくても落ち着けるようにすること、

を指導しました。この指導を通して、普段のゲームで の作戦会議中に、友達に対して「~でいい?」と言え るようになったり、意見とともに理由も伝えられるよ うになりました。

表 1 小集団活動の内容

自己紹介	第9回	ひらひらキャッチ
リズムネーム		リーダーを探せ!
ぼく・わたくしクイズ	第10回	なんでもバスケット
風船運びリレー		協力トライアングル
リズムネーム	第11回	先生からの挑戦状
ジェスチャーゲーム		仲間さがし
コップタワー作り	第12回	缶つみリレー
ミックスボイス		ミックスボイス
言葉集め	第13回	せーのでポン!
新聞乗り		人間知恵の輪
みんなでそろえよう	第14回	キーワードビンゴ
そろそろリレー		ペアでジェスチャー
絵伝えゲーム	第15回	お別れ会の出し物を
じゃんけん列車		決めよう!
比べて並べ!	第16回	お別れ会の練習をし
風船リレー		よう!
	リズムネーム ぼく・わたくしクイズ 風船運びリレー リズムネーム ジェスチャーゲーム コップタワー作り ミックスボイス 言葉集め 新聞乗り みんなでそろえよう そろそろリレー 絵伝えゲーム じゃんけん列車 比べて並べ!	リズムネーム ぼく・わたくしクイズ 第10回 風船運びリレー リズムネーム 第11回 ジェスチャーゲーム コップタワー作り 第12回 ミックスボイス 言葉集め 第13回 新聞乗り みんなでそろえよう 第14回 そろそろリレー 絵伝えゲーム 第15回 じゃんけん列車 比べて並べ! 第16回

5. 本活動の成果と課題

今年度は、iPad を使用したことにより、例年以上 に充実した活動を行うことができました。

子どもの認知特性に応じた学習指導の成果から、 ノートのマスから文字をはみ出さないで書けるように なったり、学習の時間が終わっても文字の練習をする などの姿も見られました。

小集団活動では、学校ではうまく集団の中に入れない子どもたちが、ここでは普段とは違った生き生きとした姿をみせてくれました。この活動は、本来の自分をだしても許される安心の場所となっているのです。

保護者にとっては、個別の学習支援・ソーシャルス キルトレーニングを受けられることや、専門家に相談 ができることはもちろん、同じ悩みをもつ保護者の交 流の場となっています。

学生にとっては、普段の大学生活や実習では得られ ない貴重な体験ができる場となりました。

人と、自然と、世界とふれあう 「しきじ土曜倶楽部」支援プロジェクト

河村 道彦 | 教育学部准教授 柳田 祐希 | 教育学部英語教育専修 4 年

「しきじ土曜倶楽部」では、教育活動を通じた地域 貢献の一環として、教育学部の学生たちが磐田市豊岡 地区の人々と協働して地域をあげての子育てに取り組 んでいます。以下では、「しきじ土曜倶楽部」の概要 と本年度の活動内容を紹介します。

「しきじ土曜倶楽部」の概要

磐田市豊岡東地区(旧磐田郡豊岡村敷地)は、地域の子供たちを地域全体で育てる「敷地教育」の伝統を受け継ぐ土地です。「しきじ土曜倶楽部」は、過疎化や高齢化が急速に進む地域の教育力を高め、若い世代にとって魅力のある地域にしたいという熱意から生まれた活動で、地域住民の立ち上げたNPO法人しきじ土曜倶楽部が管理、運営にあたっています。

「しきじ土曜倶楽部」では、毎週土曜日の午前中、 豊岡地区、富士見地区の子供たちが旧豊岡東小学校に 集まり、教育学部の学生が先生役として英語活動や総 合学習の指導を行います。

この活動が始まったのは10年以上前のことです。 平成14年度の学校完全5日制導入を前に「子供たちの受け皿を作りたい」と旧磐田郡豊岡村の有志が静岡大学を訪れ協力を依頼し、英語教育専修の学生数名が支援に名乗りを上げたことに始まります。学生たちの積極的な取り組みにより、息の長い活動として続いています。

現在では組織化されたグループによる主体的な取り組みとして、毎年20名以上の学生が地域住民と協働して子供たちの育成に取り組んでいます。

本年度の実施体制

本年度は4月11日の始業式から3月12日の修了式まで40回の活動を行いました。本年度から児童の数が格段に増え、幼児を含めた合計74名の子どもたちが参加しました。子どもたちは学年によりA組(年長~1年)、B組(2年~3年)、C組(4年~6年)の3クラスに分けられ、通常の活動は基本的にクラスごとに行います。本プロジェクトに参加し、子どもたちの指導にあたった学生は、いずれも英語教育専修の学



始業式

生で4年生8名、3年生10名、2年生6名、1年生8名の32名です。子どもたちと同様に学生たちも担当するクラスに応じて3つのグループに分かれて活動しました。

特別な行事のない週は、A、C組グループから2名、そして子供達の在籍が多いB組グループからは3名、計7名の学生が交替で参加します。学生たちは早朝に大学を出発し、現地スタッフと打ち合わせのあと、2人1組で先生役となり英語活動と総合学習の指導にあたります。クラスごとに予め準備した活動計画に従って活動を行い、終了後は連絡ノートを用いて保護者に子どもの様子を伝えます。午後は現地スタッフをまじえた反省会が開かれ、地域の自然や文化を通じて成長する良い機会にもなりました。

学生たちは大学でも、毎週月曜日の昼休みに集まって しきじ会議とよばれる活動を行っています。活動に参 加する学生全員が集まり、グループごとに前回の活動 を担当した者が活動の内容と子供の様子を報告し、引 き継ぎと気づきの共有を図ります。次回の活動を担当 する者はこの会議の内容をもとに活動計画を作成しま す。本年度は、佐藤美咲、森竹葵、伊藤美子の3人が 各組の代表としてグループをまとめ、学生代表の柳田 祐希が全体を統括しました。

本年度の活動

本年度は「わくわく どきどき いきいき」という目標のもと、さまざまな活動に取り組んできました。 「毎週のしきじが楽しみ=わくわくどきどき」「今日の



活動の様子 (英語)

しきじは楽しかった=いきいき」という考えのもと、毎回の活動を終え、家に帰った時、子どもが一つでも何かの糧を得て、生き生きしている姿が見られることを今年の目標としました。今年は人と交流するさまざまな特別活動を行い、わくわくどきどきする場面をたくさん設けることができ、一年を通し、子供達も学生も大きく成長することができました。

活動は通常活動と特別な行事があり、通常活動では英語活動と総合学習を行います。

総合学習では季節に応じた活動や運動、行事の準備などを行ってきました。活動は、A組はちぎり絵やプラ版づくり、B組は紙コップロケットや紙皿 UFO、C組は電池式のランタンを使った Jack-o'-Lantern 作りなど、A、B、C それぞれの組の児童、幼児の発達段階にあったものを行います。

英語活動では、毎週来で下さる ALT の先生とともに活動しています。英語活動においても子どもたちの発達段階に合わせた活動を考えています。A組はアルファベットを中心に学び、B組では簡単な表現に親しみ、C組ではいくつかの文で自分の思いを発信する活動を行いました。今年は書く活動に特に力を入れ、B組ではアルファベットの大文字・小文字に加え、短い文が自分で書け



食育

るようになりました。

通常活動以外にも、始業式(4月)、里山探検(5月)、梅ジュース作り(6月)、山と川・環境学習講座(公民館行事、7月)、七夕会(7月)、流しそうめん(8月)、水遊び(8月)、第1回留学生との異文化交流会、ハロウィン会(10月)、クリスマス会(12月)、ALT夫妻によるベルギーの紹介(1月)、豚汁づくり(1月)、第2留学生との異文化交流会(1月)、しきじ祭り(2月)、よさこい体験(2月)、植樹体験(2月)、豚汁作り(2月)、修了式(3月)など、さまざまな行事を行いました。

ここでは本プロジェクトの助成により実現され、子 どもたち、学生、地域の方々にとって有益であったと 感じることのできた留学生交流会と、植樹活動、よさ こいの指導について紹介します。

本年度、異文化を紹介していただいたのは、インドネシアからディワナさん、チカさん、ランニさん、そ



流しそうめん

して中国から、ALT の4人た。ALT や学生 コープ タイン の2 イン の2 イン の2 イン の3 イン の4 イン の5 イン の5 イン の6 イン の6 イン の7 イン の7

を向ける姿勢を育てることを目的としました。当日、 4人にはパワーポイントを使用して様々な写真ととも に自国の紹介をしていただきました。インドネシアの 方々は、国の祝日や文化、有名なフルーツや動物を紹 介した後、「そろそろおなかが減ってきたかな?」と いうコメントと一緒においしそうな料理の写真を出し て、子供達を盛り上げてくださいました。また、中国 の紹介では、日本やインドネシアと同じような料理で も作り方や味が違うことなど、子供達に分かりやすい ように発表をしてくださいました。A 組の子供達は、 自分の知っている果物や動物が出ると「これ知ってい る!日本にもあるよね!」と自分の国と関連付けて歓 声を上げ、C組の子供達はその国の治安や方言の多さ、 文化の違いなどに目を向け将来の自分の為に熱心に質 問をしていました。イスラムの女性が身につけるベー ルに興味を示し、質問をしたB組の女の子は、その 意図と意味を知り、「これも文化の違いなんだね」と



クリスマス会の様子

呟やき、さらに、イスラム教について質問したC組の男の子は、イスラム教の人々がイスラム国をはじめとする今の状況を嘆いていることを知り、真剣な眼差しで話を聞いていました。

最後には、全員でインドネシア語、中国語での「ありがとう」「またね」を習い、各言語で留学生の方々にお礼とお見送りをしました。「これでみんな4か国語が喋れるね!」という発言に、皆誇らしげに頷いていました。留学生の方々は日本語が堪能で、子供向けに分かりやすく言い換えたりしてくださり、

また、留学生の方々も、子供達の熱心さにとても驚いており、自国を知ってもらえたことがとても嬉しかったと語ってくれました。さらに、今回は学生や子供達だけではなく、留学生同士でも異文化交流ができ、参加した全員が有意義な時間を過ごすことができました。

植樹活動では、普段しきじ土曜倶楽部の活動をしている豊岡東小学校裏にある里山を管理している方々に協力していただき、子どもたちが地域の方々との交流し、自然とかかわる機会を設けることができました。 里山の方々の指導の下、ハナモモの苗木を植える活動の中で子どもたちは積極的に里山の方々と共同作業を行い、地域貢献を果たすことができました。植樹をするまでの道程で見付けた植物に興味を示したり、ハナ

植樹体験

モモの花の色を想像したり、思い思いに自然を満喫しました。普段、外での活動が少ないため、子供達は自然に触れあえたことがとても楽しかったようで、来年、ハナモモの成長と共に、里山の四季を感じたいと言っていました。身近な自然を見直す良いきっかけになったと思います。

最後に、今年で3回目になるよさこい指導です。例 年通り「よさこいサークル お茶ノ子祭々」さんに来 ていただき、よさこいの「心・技・体」を教えていた だきました。その後、お見えになった多くの保護者の 前で、その日習った「南中ソーラン」を披露しました。 何かを学生以外に披露する機会のないしきじ土曜倶楽 部の子供達は、最初は戸惑いながらも、曲が終わるこ ろには誇らしげな笑顔を浮かべていました。毎年最後 に踊る「うらじゃ」では曲中に輪になって踊る部分が あります。3回目となる今年は前年を覚えていた子供 たちが率先して手をつなぎ合い、一つの大きな輪を作 ることができました。よさこいの方々だけではなく、 学年の離れたしきじ土曜倶楽部の仲間とも、よさこい の「全員で一つのものを踊る」という雰囲気の中で大 いに交流ができたと思います。通り「よさこいサーク ル お茶ノ子祭々」さんに来ていただき、よさこいの 「心・技・体」を教えていただきました。その後、お 見えになった多くの保護者の前で、その日習った「南 中ソーラン」を披露しました。何かを学生以外に披露 する機会のないしきじ土曜倶楽部の子供達は、最初は 戸惑いながらも、曲が終わるころには誇らしげな笑顔 を浮かべていました。毎年最後に踊る「うらじゃ」で は曲中に輪になって踊る部分があります。3回目とな る今年は前年を覚えていた子供たちが率先して手をつ なぎ合い、一つの大きな輪を作ることができました。 よさこいの方々だけではなく、学年の離れたしきじ土 曜倶楽部の仲間とも、よさこいの「全員で一つのもの を踊る」という雰囲気の中で大いに交流ができたと思 います。



「南中ソーラン」を踊る姿

活動の成果と今後の取り組み

今年度の活動の中で、子供達は多くの人や自然、文化と関わることができました。また、今回のプロジェクトで購入したプロジェクターを使用したことで様々な視覚資料を使用することができ、よりリアルな体験をたくさんすることができました。学生も、子供達も、今年度の目標である「わくわく どきどき いきいき」するような活動を大いに行うことができたと感じます。

また、今年は学生も様々なことにチャレンジをした 年でした。子供がより興味を示す提示法や、楽しいと 思える活動案を全員で試行錯誤を重ねながら実践して いきました。このような経験を積む中で、教員となる ための技術や資質を磨き、自らの理想の教師像に近づ くための努力を絶えず行うことができました。さらに 子供達と実際に触れ合えるという貴重な機会を通し、 子ども理解や年齢に沿った進め方を学ぶことができま した。その知識と技術を活かし、来年度以降も、学生、 子供達共に、引き続き里山の自然と触れ合うとともに、 様々な文化に触れ、豊かな感性と国際社会で活躍でき る柔軟な考え方を身につけていきたいと思います。

デザインによる地域活性化プロジェクト - 焼津市 笑顔でつなぐポスター展 -

川原﨑 知洋 | 教育学部講師

1. はじめに

地域創生や地域活性化が注目されている中、日本各地では、その土地の特徴を生かしたユニークな取り組みが実施されています。昨年度、静岡大学教育学部デザイン研究室(伊藤文彦研究室と共同)では、焼津さかなセンターの活性化を図るための全66店舗のポスター制作に取り組みました。今年度はポスターの対象範囲を広げ、焼津市全体を対象としたプロジェクトに参加しました。このプロジェクトは焼津市にある自然・食・観光・文化・歴史などの55選について学生が主体となり、地元の人々と交流しながらポスター制作する取り組みです。対象にまつわるモノ・コトについてリサーチし、さらにその対象に関連する人々にインタビューをし、得た情報を基にポスター制作を行いました。静岡大学教育学部デザイン研究室の他に、常葉大学、静岡産業大学の学生が参加しました。

本報告では、このプロジェクトのプロセスを紹介しながら、プロジェクトに参加した学生が得ることのできた成果と、デザインによる地域活性化についての今後の課題を報告します。

2. プロジェクトの始動

7月26日(月)、静岡大学にてオリエンテーションを行いました。笑顔でつなぐポスター展実行委員会と、広告代理店である株式会社静鉄アド・パートナーズからプロジェクトの主旨説明がありました。今年度のプロジェクトメンバーとして、デザイン研究室の大学院生5名と学部3年生10名が参加し、3名の5チームを編成しました。また、55選のうち、静岡大学は19のスポットを担当することとなり、担当する場所の振分けと確認を行いました。実行委員会からは学生たちの固定観念にとらわれない自由な発想力に大きな期待を寄せており、焼津市の魅力の新たな価値付けが重要なミッションであることが情報共有されました。昨年度のプロジェクトに参加した大学院生からは、デザインプロジェクトに参加するにあたっての心構えを話してもらい、本年度のプロジェクトは始動しました。



焼津市笑顔でつなぐポスター展のオリエンテーション

3. ポスター制作

(1) 情報の収集

学生たちは8月上旬~中旬にかけて、焼津市内の担当する場所を訪ね、その対象にまつわる人・モノ・コトについて取材しました。アイデアを生み出すための「ネタ」を探しつつ、コンセプトを練っていきました。

(2) ポスター要素とキャッチコピーの重要性

ポスターは大きく2つの要素に分けることができます。1つはキービジュアルと呼ばれる「イラストや写真」で、もう1つはコピーと呼ばれる「言葉」です。特にキャッチコピーは、ポスターで最も伝えたいこと(=コンセプト)を凝縮した言葉であり、この言葉の選び方によって、対象の新たな価値を創出することができるか否かが決まります。アイデアを練る時間の大半をキャッチコピーに費やしました。キャッチコピーのアイデアをいかに多く出すことができるのかがポスターをデザインする上での重要ポイントで、このアイデアを出すためのベースが事前に行う情報収集になります。グループ内での擦り合わせを経て、教員を交えたブレストを複数回に分けて行いました。

(3) 中間報告会 8月31日(月)

全19点のポスターの中間報告会を行いました。チームごとにポスターのプレゼンテーションを行い、学生間で提案されたポスターについての意見交換を行いました。適切なフィードバックを得るため、評価シート

の記述も行いました。提案したポスターが伝わるのか、 表現方法が適切か、キャッチコピーが新たな価値を創 出しているか等について互いに議論し合い、客観的な 視点でポスターを捉え直すことが目的です。



中間報告会での作品評価 評価シートを用いたフィードバック

(4) 最終報告会 9月7日 (月)

最終報告会では中間報告会で出された指摘事項を基に修正案が示されました。コンセプトから再考し、中間報告会とは異なる新たなアイデアを提案するチームもありました。最終審査で提案された作品をベースに、写真の色調補正や文字組みの微調整を再度行い、大判印刷するためのポスターとしての完成度を上げていきました。

4. 笑顔でつなぐポスター展

焼津さかなセンター祭りに合わせ、センター内に特設掲示板が設置され、「焼津市笑顔でつなぐポスター展」が平成28年10月10日から開催されました。ラジオ・新聞による広報も行われ、焼津市民のみならず、静岡県内に広く情報発信されました。会期中には来場者に対してポスター展のアンケート調査を実施しました。その結果、ポスターは内容の面白さというよりも、まずは一瞬見た時の印象や、分かりやすさというキーワードが浮上し、デザイン制作における要点を整理する上で良い契機となりました。



焼津さかなセンター内でのポスター展示

5. まとめ

今回のデザインプロジェクトに参加した学生の事後 アンケートを分析すると、ほとんどの学生がデザイン 制作を通すことで焼津市に愛着が湧いたことが分かり ました。同時にデザインを考える上で、自分の足で取 材し、ポスター対象となる関係者に直接話を聞き、コ ミュニケーションをとることの重要性を実感したこと が今回のプロジェクトの大きな成果だと思います。

地方には各々の魅力が潜在的に存在します。隠れた 魅力を発掘し、デザインの力でそれを価値づけするこ とは意義のあることだと思います。ただし、誰もがそ の魅力を広く発信することを必ずしも望んではいない のではないかということも分かってきました。積極的 な発信が必ずしも人を幸せにするものだと言い切るこ とはできません。地域の持つ魅力を発見し、その魅力 を表現する力を身につけることはもちろんですが、そ の魅力をどのように伝えていけば良いのかを見極める 力が今後求められるのではないでしょうか。そのよう な力を身に付けることのできるカリキュラム構築が今 後の課題だと考えています。



平成27年8月31日 静岡新聞夕刊全県版に掲載

遊びや体験活動を通して学びに熱中する子ども育成の場 「ちびっこ寺子屋」プロジェクト



後藤 友香理 | 教育学部助教 石橋 翠 | 教育学研究科音楽教育専修2年 甲賀 健太 | 教育学研究科技術教育専修2年

1.活動の経緯

本プロジェクトは、子どもの体験活動の機会が減少 してきていることや、教育学部の学生が大学で学んだ 専門分野を活かした実践を行う機会が少ないこと、地 域住民のつながりが希薄になってきていることなどへ の課題意識から活動をスタートし、今年度で5年目と なりました。これまでの活動においても、教育学部の 学生と地域住民とが連携して「五感学校」を開催し、「地 域に根差した子ども育成の場づくりしに取り組んでき ました。また、複数の教科が共同で企画に携わる本プ ロジェクトの特性を生かし、複合教材の開発にも取り 組んできました。それに加えて本年度は、特別支援学 校に通う児童へ向けてのイベントを開催することもで きました。より子どもたちの目線で企画を立てること ができたと考えています。さらに教育学部以外の、他 大学の学生との交流も増え、視野が広がりました。互 いにアドバイスを送り、意見を交換し合うことで、共 に子どもの主体性を尊重する活動を目指し、成長でき たように感じます。

2. 「ちびっこ寺子屋」プロジェクトについて

「子どもたちに遊びや体験活動を通した学びを提供すること」を目的として、地域の子育て支援団体「コトコトプロジェクト」と共同でイベントを開催し、その中の一つのブースとして、教育学部の学生が専門分野を活かしたワークショップを行う、「ちびっこ寺子屋」を実施してきました。

3. 今年度の企画イベント

・第1回 「秋の五感学校」

2015年9月6日(日)

会場:木藝舎 SATO (静岡市葵区)

・第2回 大浜ビーチフェスタ内「ものづくり教室」

2015年9月20日(日)

会場:大浜海岸(静岡市駿河区)

・第3回 「冬の五感学校」

2016年2月7日(日)

会場:足久保公民館(静岡市葵区)

4. 活動内容

<第1回 秋の五感学校>

五感学校初となる、特別支援学校および特別支援学 級に通う子どもたち向けのイベントを企画しました。 昨年度までは、教育学部からいくつかの教科の学生が それぞれの特性を活かしたワークショップを行ってき ましたが、今回はイベントの対象者がこれまでとは異 なることから、主に2つのことを全員で行うことにし ました。その内、私たちが大きく関わったのが五感学 校の垂れ幕作りです。大きな布にあらかじめビニール テープで模様を作っておき、あとは子どもたちに絵の 具を手や足につけて思いっきり描いてもらいました。 普段家ではできない大胆な遊びに子どもたちは熱中し ているようでした。数種類の色の絵の具を用意しまし たが1つの色にこだわって描く子どもが多く、彼らの 色彩感や芸術に対する想いをくみ取ることもできまし た。親御さんからもこんな体験をすることはなかなか 出来ないので良かったとご好評いただきました。特別 支援の子ども向けのイベントということで、これまで より細部にこだわって企画をし、私たちも貴重な体験 をすることができました。今後この垂れ幕はイベント 時に飾ることになっています。



完成した垂れ幕

<第2回 大浜ビーチフェスタ内

「ものづくり教室」>

昨年度に引き続き、静岡市駿河区の大浜海岸で2015年9月20日に開催されたイベント「大浜ビーチフェスタ」において、技術科専修によるものづくりワー

クショップを実施しました。今年度の大浜ビーチフェスタには約2000人が来場し、ちびっこ寺子屋が出展した体験ブースにおいても多数の参加者がヒノキの鉋屑を利用した薔薇づくりを体験しました。本題材のコンセプトは、ヒノキ材の鉋屑を日本の伝統的な遊びのひとつである折り紙に見立て、子供から大人まで楽しむことができる造形遊び、としました。

参加者は、木が紙のように薄く柔らかくなることに 驚き、削りたてのヒノキの香りや美しい淡いピンク色 を感じつつ、意欲的に薔薇の花を製作していました。 また、薔薇だけでなく手裏剣やバネ等、様々な造形活 動に熱中し、子供だけでなく親御さんをも巻き込んで 一緒に取り組む様子がとても印象的でした。参加者か ら、作ったものは部屋に飾ったりお風呂に浮かべたり してその後も楽しめるといった活用法の提案があり、 みな大切そうに持ち帰っていました。以前の五感学校 でちびっこ寺子屋に参加して下さった方も多数いて、 多くの方が次回開催を期待してくださいました。

本イベントでは、地元の企業や大学、自治会等が協力して開催されるため、イベント当日だけでなく毎月の定例会や反省会を通して、様々な方と交流を深めることができました。2年連続での参加ということもあり実行委員会としてイベントの企画・運営に携わることができ、ちびっこ寺子屋のPRにも繋げることができました。

なお、大浜ビーチフェスタ 2016 へのちびっこ寺子 屋出展も決定しており、すでに 2 月から定例会に参加 し準備を進めています。



技術科 ワークショップの様子

<第3回 冬の五感学校>

自然の素材をテーマに各ブースを企画しました。まず会場の中央には大豆と緑豆、花豆を大量に用意して豆プールを作り、好きに遊んでよい場としました。子どもたちは豆の海に身体をうずめながら、さまざまな種類の豆が発する匂いや音、感触を全身で楽しんでい

ました。その後、音楽教育専修では豆プールの豆を使ったマラカス作りをしました。ヤクルトの容器や、フイルムケース、牛乳パック、紙コップなどを用意し、思い思いのマラカスを作ることができたように思います。そして作った楽器を紙芝居にでてくる雨や砂浜の音と一緒に演奏しながら楽しみました。1つの楽器でも鳴らし方や聴き方によって様々な音がすることに子どもたちは気づいている様子でした。大学から大きなレインスティック(雨の音をならすことができる擬音楽器)を持って行ったところ、子どもたちは大変興味を示していました。



紙芝居 レインスティックにも興味津々

技術教育専修では、圧縮木材(木材を加熱してから 圧縮することにより、湯水に浸すと再び膨らむ)を活 用したアロマストラップ作りを行いました。子どもた ちは木材が膨らんで匂いを吸収していく様子に驚き、 ストラップは大人気でした。木が膨らむという原理そ のものをしっかり理解した子どもは少なかったかもし れませんが、共に体験していた親御さんは興味を持っ てくれたので親御さん経由で膨らむ木の正体について も知ってほしいと思います。

5. プロジェクトの成果と今後の取り組み

今年度の活動において特筆すべき点として、特別支援に通う子ども向けの企画を開催できたことが挙げられます。特別支援学校での教育実習経験を活かし、子どもたちに予想される動きや思いを提案しながら細部までこだわった企画を行うことができました。こうした子どもたち向けのイベントは少ないとのことで、親御さんからも喜びの言葉を多くいただくことができたのが私たちにとっては何よりも嬉しいことでした。しかし昨年度浮上したスタッフ不足や運営面での課題が解決しないまま今年度が終わる形になってしまったのは残念です。継続した活動により、周囲の方々に私

たちの取り組みが徐々に知られるようになったのは喜ばしいことですが、それにスタッフの数や私たちの運営力が伴っていないのが現状です。あまりに多くの参加者が集まってしまったことで付近の住民から騒音の苦情が上がり、予定していた会場でのイベントを開催することができませんでした。そのため、昨年度より少ないイベント数となってしまいました。学生と地域住民という全く生活の異なる者同士の企画であるからこそ、互いの意見を交換する場を今より多く設け、これらの問題に真摯に向き合わなければならないと考えています。

静岡市東豊田学区における雑紙回収率アップ事業

田宮 縁 | 教育学部准教授

1. 問題の背景

「紙類」は、可燃ゴミの中に約21%含まれており(平成26年度静岡市家庭系可燃ごみ組成調査結果)、静岡市ではごみの減量・リサイクルをより一層推進するため、「雑がみ重点回収」を実施している。しかし、雑紙についての認知度は低く、行政も啓発活動に尽力しているが、地域住民が主体となった「雑がみ重点回収」活動は限られている。

2. 本申請に至る経緯

(1) 平成25年度における活動

東豊田中学校 PTA 環境委員会(申請者は地域住民という立場)は、PTA 及び地域住民に「雑がみ重点回収」を呼びかけた。また、生徒を対象に雑紙回収とアンケート調査を行った。その結果、登校時に雑紙回収を行うことで生徒や家庭への雑紙への認知度を高めることはできたが、中学生の自由記述のなかに、「回収した雑紙がどのように取り扱われ、どのような過程を経て再生紙となるのかということをきちんと知らせないと回収にはつながらない」という回答があり、実感を伴った学びが必要であるということが明らかになった。

(2) 平成26年度 卒業研究

指導学生2名が卒業研究で以下の調査を行った。

- (A) 雑紙とカラムシのみを使用したハガキの材料の 定量化とハガキづくりのマニュアルの作成
 - ・カラムシ (イラクサ目イラクサ科の多年生植物) からとった繊維 ティースプーン 1 杯
 - ·水 200cc
 - · 雑紙 4g
- (B) 東豊田幼稚園 (現 東豊田こども園) における 親子での雑紙のハガキづくりのプログラム(指導計画) の作成、実施、検証。
- (C) プログラム前後の PTA による資源回収時の雑紙の回収状況調査
- →プログラム実施後、回収率は向上した。雑紙のハガキづくりプログラムの効果を実証。

(3) 平成27年度 東豊田こども園からの依頼

平成26年度にプログラムを実施した東豊田こども 園長より、子どもと保護者に、同じプログラムを実施 してほしいという要望があった。

また、卒業研究に際し、協力していただいた静岡市 ごみ減量推進課に卒業論文を提出したところ、イベン ト等の開催の際には、共催、協力をしたいという要請 があった。

3. プロジェクトの目的

雑紙とカラムシを使ったハガキづくりのイベントを 実施し、地域の雑紙回収の啓発活動を行う。また、ハガキの作り方を示したパンフレットを啓発活動のツールとして作成することを目的とする。

4. 主な活動

< 10 月上旬~>

- 組織づくり
- ・こども園との日程調整
- ·教材研究

カラムシの繊維の抽出とハガキづくり



大学付近でカラムシを採取する



カラムシの表皮をはぎ、細かく刻んで、煮る。そして漂白。

< 10 月中旬~>

- · 教材準備
- ・掲示物および配布物の作成



学生が制作した配布用のチラシ

<イベント当日>

日時:11月2日(月)・6日(金)9:00~

場所:静岡市立東豊田こども園昇降口

参加者:親子10組×2日



雑紙とカラムシについて説明する学生

11月2日、雑紙のハガキ作り紹介してくださった 静岡市ごみ減量推進課の牧氏、当日開催される学校評 議委員会の出席者(地域の方、元園長ほか)、幼児教 育専修2年生も雑紙のハガキ作りを参観した。

雑紙とカラムシの説明や雑紙を使ったハガキ作りの 手順を聞いた後、親子でのハガキを作った。

ミキサーにカラムシの繊維、水、雑紙を入れて攪拌 する。雑紙がこなれていく様子を子どもたちはじっと 見ている。ドロドロの液体を紙すきキットに流し込み、 ハガキを作る。



当日の様子は、静岡新聞(2015年11月4日朝刊) に取り上げられた。



説明した。園児は学生や保護者の手ほどきを 受けながら、雑紙を細かくちぎったり、材料 をミキサーにかけたりする 作業に夢中で取り 組んだ=写真=。今後1、2日間乾かして完成 させる。

参加した同区の柴田ゆずちゃん(5)は「完成 するのが楽しみ」と笑顔を見せた。

5. 効果と今後の活動

子どもと保護者は、活動を通して雑紙は資源である ということを実感したのではないだろうか。

この啓発活動を広げていくためのパンフレットにつ いては、平成27年度中に作成し、平成28年度以降、 小中学校の PTA の環境委員会等に配布する予定であ

学生と地域社会の協働による地域防災力向上プロジェクト



藤井 基貴 | 教育学部准教授 藤井基貴研究室(大森拓未 秋山真穂 仁科羽純 松井未夜子 堀江愛美 大場翼 高林真衣 内田千尋 工嶋笑里 志村卓史)

1 本事業の目的

本事業の目的は、学生が地域社会と連携して、地域 防災を推進するための教材、防災プログラム、防災イ ベントを開発、実施、検証をすることにある。

東日本大震災以降、地域の子ども、高齢者、外国人、 障がいを抱えた人たちといった「災害時要援護者」へ の防災支援が課題となっている。静岡大学教育学部藤 井基貴研究室では、2014年度に内閣府「防災教育チャ レンジプラン」の助成を受けて、地域のお祭りや公開 講座等の場を利用した地域での防災活動に取り組ん できた。2015年度は本事業による研究支援のもとで、 外国人居住者向けの防災教材の開発・実践、体験型防 災学習ブースの出展、放課後子ども教室への参画等を 推進し、地域防災への貢献を目指してきた。本事業に おいて主たる連携先となったのは以下の通りである。

- ①静岡県内の日本語学校:防災授業の支援
- ②吉田特別支援学校特別支援学校:地域まつり
- ③静岡市:大浜ビーチフェスタ実行委員会
- ④静岡市教育委員会社会教育係: 東豊田小学校 (放課後子ども教室)
- ⑤静岡県内の小・中学校: 防災教材の開発及び提供

本事業では上記の機関や組織と協働して、地域における防災教育実践の可能性を探るとともに、実践の改善及び普及を図った。取り組みの成果と課題については、報告書にまとめるとともに教育学部内で年度末に開催される「安全教育研究会」で報告し、検証する。

2 本事業の内容

本事業の内容は以下の3つに区分される

- 1) 実践:地域のお祭り及び学校での出前授業を実施する。学生による単独の実践とせず、連携先の担当者と協働して教材及び事業を開発・実践する。
- 2)調査:地域における防災事業について県内外の優れた取り組みについて調査を行う。
- 3) 報告:成果報告書を作成するともに、防災に関する意見交換の場や教育学部内「安全教育研究会」

で報告する。

3 「実践」について

3-1 日本語学校「国際ことば学院」

国際ことば学院において留学生の防災意識や知識についてアンケート調査を行うとともに、その分析に基づいて同校の講師による授業開発の支援及び授業参観を行った。加えて、静岡県西部危機管理課とも連携し、地域の外国人への防災講座の視察検討を行った。

3-2 吉田特別支援学校

2015年11月28日に吉田特別支援学校により開催された「もえぎまつり」に防災ブースを出展するとともに在校生向けの防災講座を担当した。同学校の長谷川教諭と協働して、特別支援学校に通う児童生徒が楽しみながら防災について触れることのできる教材の開発をすすめた。低学年の児童でも楽しめる「防災絵合わせサイコロ」(写真1)を製作するとともに、大学生と児童らが「じしんだんごむし体操」を実践した。



写真1 「防災絵合わせサイコロ」

3-3 大浜ビーチフェスタ 2015

2015年9月20日(日)に静岡市・大浜海岸で開催された「大浜ビーチフェスタ2015」において、親子で楽しめる防災ブース「防災フィッシング」を出展するとともに、中央ステージにて幼児を対象とした防災イベントを担当した。



写真2 大浜ビーチフェスタでのブース出展

3-4 放課後子ども教室

2015年10月14日(水)に東豊田小学校の「放課後子ども教室」において、紙芝居とダンスとゲームを組み合わせて開発した防災プログラム「子ども向け防災パッケージ」を実施した。発達段階に応じた防災教材の開発や多人数向けの教育プログラム開発の必要性が自覚された。

3-5 長泉町立北中学校、附属静岡小学校

長泉町立北中学校と協働して地域災害をテーマとした授業開発を行った。開発された教材は2015年10月及び11月に同校の担任教員によって授業実施され、大学と学校とが協働で防災教材を開発した事例として地元メディアでも紹介された。

また、附属静岡小学校では低学年を対象とした防災 授業を実施し、発達段階に応じた防災教育の開発を推 進した。同授業を行ったクラスはその後に実施された 避難訓練においても適切な避難行動がとれた児童が多 かったと報告されており、授業の成果が認められた。 引き続き附属学校園との連携を図る予定にしている。

4 「調査」について

本事業及び本学防災総合センターの支援のもと、静岡県、岩手県、愛知県において地域における防災講座や地域と連携した学校防災の取り組みについて聞き取り調査を行った。岩手県では震災遺構を活用した語り部による防災知の伝承が行われており、過去の災害記憶を学校教育のなかでどのように活用するかという新たな教材開発の視点を得ることができた。

また、愛知県半田市立亀崎小学校では児童による自治防災組織「亀っ子防災隊」や地域住民の連携のもとで行われている「防災学習運動会」の取り組み等について担当教員から説明をうけた。あわせて研究室で開発した防災教材を同学校に提供し、1年生4クラスで担任教員との協働授業を行った(写真3)。

5 「報告」について

本事業及び本学防災総合センターの支援のもと、教員を目指す学生たちが、学校や地域社会と協働して特色ある防災活動を進めてきた。これまでの取り組みが評価され、兵庫県等主催「ぼうさい甲子園」(2016年1月10日)にて大賞(大学部門)を受賞し、兵庫県公館にて活動報告を行った。また、本学の村越真教授を代表とする科研費「リスクマネジメントプロセスを援用した安全学習教材と授業案の作成及びその効果の検証」が主催する「安全教育研究会」(2016年3月23日開催)においても成果及び今後の課題についての報告を予定している。

6 新聞・テレビでの紹介

- ・朝日新聞(静岡版)「見守るポーズ踊って憶えて」 2015 年 9 月 20 日
- ·静岡新聞「遊び感覚で行動喚起」2015 年 10 月 11 日
- 毎日新聞(静岡版)「静岡大生らを表彰」2016年1月11日
- ・静岡新聞「静岡大・藤井研究室が受賞」2016年1月12日
- ・朝日新聞(静岡版)「災害対応、悩んで学ぼう」2016年1月31日
- ·毎日新聞(中部版)「静岡大生 出前防災授業」 2016年2月17日
- ・中日新聞(知多版)「小学生に身守る授業」2016年2月18日
- ・静岡第一テレビ「地震防災チェック」 2015 年 8 月 15 日
 - ・NHK静岡「年代別の防災授業」2015年11月9日
- ・静岡第一テレビ「被災地で初 究極の選択を授業で」 2015 年 12 月 10 日
- ・静岡第一テレビ「地震防災チェック」 2016 年 1 月 9 日



写真3 愛知県半田市立亀崎小での授業実践

学生ボランティアによる「< つながりづくり > 実践事例集」の開発 ~学校・地域における多文化共生理念の共有化を目指して~

矢崎 満夫 | 教育学研究科准教授 石井 祈、岩渕 真理奈、中村 百合香、藁科 梨江 | 教育学部3年

1. 本プロジェクト実施の背景と目的

2014年の法務省調査では、在留外国人の数は約212万人とされ、ここ数年、日本に居住する外国人数は増加を続けています。日本政府は将来の労働力不足を外国人労働者で補うことも考えていることから、今後はさらに増えていくことが予想されます。

また、文科省の2014年調査によれば、静岡県内の公立学校には全国第3位に及ぶ「日本語指導が必要な外国人児童生徒」が在籍しているといわれています。そうした子どもたちは、単に日本語の指導を必要としているだけではなく、日本の文化習慣に戸惑ったり、友人や先生との関係性に悩んだり、学校の勉強についていけずに意欲をなくしたりするなど、多くの困難を抱えているケースが少なくありません。また、彼らの家族と地域の人々との交流もほとんど見られず、外国人家庭は地域の中で孤立しがちです。

以上のような問題を「つながりの有無」という観点から考えてみると、彼らは「日本語」「日本の文化習慣」「学校の勉強」等の「文化的つながり」や、「友人」「先生」「地域の人々」等の「社会的つながり」が希薄な状態であると言うことができます。また、彼らを迎える日本人側も、言葉や文化が異なる人たちとどのように接すればよいかわからず、どうしても彼らに対して「身構える」姿勢となりがちです。しかし、このまま両者のつながりが希薄なまま時が過ぎていったとしたら、将来は一体どのような学校や地域になっていくのでしょうか。今こそ、外国人と日本人とのつながりのあり方について、真剣に考えていく必要があると思います。

これまで私たちプロジェクトメンバーは、外国人や 国際結婚家庭等の「外国につながりのある子どもた ち」(以下、外国の子どもたち)と積極的にかかわり、 学校や地域において〈つながりづくり〉の支援を行っ てきました。〈つながりづくり〉の支援とは、学生ボ ランティア等の支援者が仲介役として、たとえば学校 で「日本語」「教科の学習内容」「友人」「先生」等と のつながりが生まれるように関与していく支援のこと です。また、地域においては、日本人家庭と外国人家 庭とが「遊び」や「食べ物」を通じて交流できるイベントを開催し、少しでも両者のつながりが生まれるように働きかけを行う支援のことです。

学生ボランティアたちは数年来、こうした〈つながりづくり〉支援の理念を共有し、その実践に努めてきました。しかし、個々の学生ボランティアが行った具体的な実践事例を全体で共有し、蓄積していくことは、これまであまり徹底されてきませんでした。そのため、せっかく個人レベルで優れた実践事例があっても、それが次世代にきちんと引き継がれていかないという課題がありました。

そこで本プロジェクトでは、学生ボランティアによる〈つながりづくり〉支援の成功事例を集約し、それらを学生メンバー間はもとより、学校や地域の他の支援者らとも共有することによって、当該支援活動の輪を広げていきたいと考えました。

2. 本プロジェクトの概要

本プロジェクトは、静岡大学の学生を主体としたボランティア団体「NPO 法人 ONES」(以下、ONES)のメンバーたちとともに進めていきました。ONESは、外国の子どもたちの生活しやすい環境づくりを目指して、日本語・教科学習・対人ネットワーク形成等の支援を行っているボランティア団体です。

当該事例集では、ONES の学生メンバーたちが行ってきた「学校訪問型支援」(静岡市)と「多文化交流イベント」(富士市)において、これまでどのような〈つながりづくり〉支援の実践があったかを調査し、まとめることにしました。

以下では、ONESによる「学校訪問型支援」と「多文化交流イベント」の2つの活動内容について、簡単に説明していきたいと思います。

2-1. 学校訪問型支援について

「学校訪問型支援」とは、静岡市教育委員会と連携して展開しているもので、市教委からの支援要請を受けて、ONESメンバーが外国の子どもたちがいる小・中学校に赴き、その子どもの置かれている状況やニー

ズに合わせて、日本語・教科学習の支援や仲間づくり 等のサポートを行う活動です。支援対象の子どもと日 本語、教科、友だち、先生等との〈つながりづくり〉 を意識し、支援者が不在の時でも、それらのつながり が継続するような環境づくりと、子どもの自立を目指 した支援を行っています。

学校訪問型支援には、授業をしている教室に学生ボランティアが入り込み、対象児童生徒の学習支援等を行う「入り込み支援」と、授業の行われている教室とは別の場所で個別の学習支援を行う「取り出し支援」の2種類があります。今年度は12名の学生が市内6校の小・中学校で、「入り込み支援」を中心とした活動を行ってきました。

2-2. 多文化交流イベントについて

「多文化交流イベント」は、世界の遊びやスポーツ、料理、音楽、ダンスなど、言葉にあまり依存しない活動を通じて、文化背景の異なる子ども同士の交流を生み出し、「多文化共生のためのきっかけをつくる」ことを目的とした支援活動です。

今年度は富士市において、富士市立富士第一小学校とブラジル人学校エスコーラ・フジとの連携のもとに開催しました。富士市内の公立小学校等にチラシを配布して参加者を募った結果、富士第一小学校34名、富士南小学校3名、岩松小学校2名と、エスコーラ・フジ16名の、合計55名の子どもたちがイベントに参加してくれました。また、日本人とブラジル人の保護者も、合計8名の方が参加してくださいました。



多文化交流イベントに参加した人たち

当該イベントにおける活動内容は、ストレッチ兼アイスブレイク(新聞紙ゲーム・にらめっこ)、体を動かす遊び(ラブラブアイランド・ピンポン玉リレー)、創作活動(小物入れづくり)、歌とダンス(曲「チューリップ」)でした。すべてのプログラムで、日本人の子どもと外国人の子どもの交流を意識した働きかけを行いました。当日、子どもたちは、両者混成のチーム

ですべてのゲームに参加し、昼食を食べ、交流を深めました。また、昼食のカレーライスは、日本人・外国人の保護者と ONES の学生メンバーが協力して調理を行いました。みんなで一緒に昼食をつくることで、保護者同士の自然な交流も見ることができました。

3.「〈つながりづくり〉実践事例集」の内容

3-1. 事例集開発のプロセス

以上のように私たちは、行政・学校・地域との連携を図りながら、主として学校や地域の中で暮らす外国の子どもたちの周りに様々なつながりが生まれることを目指して、「学校訪問型支援」と「多文化交流イベント」の活動を展開してきました。そして、これらの〈つながりづくり〉支援の成功事例を分析・整理・統合し、まとめていくことにしました。

まず、「学校訪問型支援」については、過去も含めて これまで支援に入ってきたボランティア学生個々に対 し、以下の点についてインタビューを行いました。

- ①支援前の子どもたちの姿から見えた具体的な課題は 何か。
- ②上記の子どもの課題に対して、ボランティア学生は 何を考え、どのような支援を行ったか。
- ③〈つながりづくり〉の観点から見て、支援活動を通じての子どもの変容にはどんなことが挙げられるか。

また、「多文化交流イベント」については、今年度 の活動に参加したボランティア学生に、イベント中の 子どもたちの様子と自身の支援行動について尋ねる事 後アンケートを行い、どのような〈つながりづくり〉 の事例があったかを分析しました。

3-2. 〈つながりづくり〉支援の具体例

ここで、「学校訪問型支援」における〈つながりづくり〉の実践事例を1つご紹介しておきましょう。フィリピンとつながりのある小学2年生のAさんは、支援当初、休み時間にクラスメートと遊ぶ姿が見られず、一人で絵を描いて過ごしていることが多い子どもでした。しかしボランティア学生は、学校生活の様々な場面でAさんの活発な一面を見ていたため、本当は休み時間に友だちと遊びたいと思っているのではないかと考えました。そこでボランティア学生は、休み時間にまず自分がクラスの他の子どもたちとたくさん遊んで仲良くなり、Aさんが遊びの中に入って来やすい環境をつくるよう努めました。そして、タイミン

グを見計らって遊びに誘ってみたところ、A さんは 友だちの輪の中に自然に入ることができました。その 後、ボランティア学生がいない場面でも、A さんは 友だちとおしゃべりをしたり、いっしょに遊んだりす ることができるようになっていきました。

以上は、ボランティア学生による〈つながりづくり〉の支援によって、対象の子どもと周りの子どもたちとの関係性が改善された成功事例だと言えます。

3-3. 本事例集の活用方法について

本事例集では、上記のような実践に基づく成果を、「①子どもの課題の把握②支援者による〈つながりづくり〉支援の実際③支援後の子どもの変容」という構成で紹介するようにしました。そして、ONESのボランティア学生をはじめ、支援に携わる人たちに「教材集」としても使ってもらうことを想定し、読んだ人がまず自分なりの支援方法を考えられるよう、①の「子どもの課題の把握」の後に、「あなただったらどんな支援を行いますか?」という問いかけを入れました。

本事例集の試行版を使って ONES のミーティング を実施してみたところ、支援経験者はもちろん、支援 未経験者も〈つながりづくり〉支援についての具体的 議論に参加することができ、以前よりも当該支援方法 に関する共有化が図られたように思います。

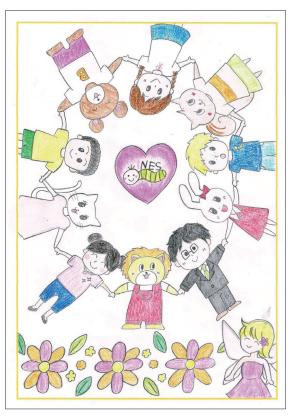
この事例集は、ONESのボランティア学生が支援活動を行う際の参考資料・教材として活用するだけでな

く、支援先の学校の先生や地域で支援に携わっている 人々とも共有できるように、今後幅広く配布していく 予定です。そうすることで、「異なる人間同士」のよ り良い関係性を構築する〈つながりづくり〉支援の理 念が少しずつ伝わっていき、地域における多文化共生 の輪が広がることを願っています。

4. 今後に向けて

学校や地域において外国人と日本人とが共に暮らす中、その環境を整えるための〈つながりづくり〉の支援は、日本語を効率よく教えたり、外国語を駆使して通訳したりする等の、特別な知識や技能は必要ありません。確かに〈つながりづくり〉を支援者一人だけで行うのは簡単ではないでしょう。しかし、より多くの人たちが互いに〈つながりづくり〉を意識することによって、「多文化共生」の理念が地域社会に広がっていけば、日本人・外国人等の区別は関係なく、どの人たちにとっても過ごしやすい環境が整えられていくと思います。

少し意識を変えるだけで、だれでも〈つながりづくり〉の支援は行うことができます。本事例集は、その考えを様々な人たちと共有できるようにと考えて開発を進めました。今後、学校・地域等において、すべての人たちが暮らしやすい社会が形成されていくことを祈りつつ、私たちはこれからも〈つながりづくり〉の支援に尽力していきたいと思います。



浜松市における地域文化の情報発信のための 「浜松鈴鈴(りんりん)」発行事業

杉山 岳弘 | 情報学部教授

野口 菜摘 | 情報学部 4 年(学生リーダー) 村井 梨乃 | 情報学部 3 年(学生サブリーダー)

江崎 みのり、鈴木 美咲、西尾 美沙季、深澤 未津帆 | 情報学部4年

鈴木 祥子、堀口 茉子、山尾 南雲 | 情報学部 2 年

権田 智子、深津 沙耶 | 情報学部 1 年

1. はじめに

若者の地域文化に対する意識は薄く、地元や住んでいる土地に対する文化的な理解は低い。浜松市としても地域の活性化には若者の興味関心を地域に向ける必要があると認識しているが、効果的な宣伝・広報活動は模索している。そこで、大学生の目線で若者へ地域文化を発信し地域により親しみを持ってもらえるように、本事業を行う。

2. 実施概要

昨年度まで、「ふじのくに地域・大学コンソーシアムのセミ学生地域貢献推進事業」で「浜松市に残る徳川家康公に関する物語の資産化プロジェクト」で採択され、1年間にわたり家康公に関するかわら版を計10号発行してきた。この実績により学生の組織化と地域の組織との信頼関係ができつつあるので、引き続き、対象を広げ、「浜松鈴鈴(りんりん)」と改め、学生目線による、浜松市における地域文化の情報発信を行う。本事業では、全5号を発行する事業を推し進めていく。家康公と地域文化に詳しく、かつ出版業の専門家である静岡戦国プロジェクト実行委員会の鈴木厚夫氏に校閲等を依頼する。また、地域の文化、特にお祭りに関するイベントを掲載して参加を促す。

3. 実施計画と結果

地域情報誌「浜松鈴鈴」を各月出版7月、9月、11月、1月、3月で全5号を発行し、最終的に小冊子にする。各月毎に企画、取材、原稿作成、編集、校閲、印刷し、S-Port、浜松市博物館、浜松市役所市民部文化財課、浜松市美術館、浜松市中央図書館、浜松商工会議所、公益財団法人浜松観光コンベンションビューローに配布する。実際の実施された内容を、号番号、表紙写真、発行日、目次、取材先、取材・編集に関わった学生を表1に示す。

4. 事業の結果と効果

大学生の目線で地域文化を発信し、地域から注目され新聞報道やNHK 静岡局「たっぷり静岡」のコーナー「キラキラしずおか人」での学生の出演に繋がり、市民から問い合わせなどもあり、地域文化に親しみを持ってもらうことができた。

出版事業をできる学生中心の組織の体制作りが完成し、任意団体「浜松鈴鈴編集部」として活動を開始することができた。また、「浜松経済新聞」から問い合わせがあり、学生記者としても一部活動を広げている。

連携先として、当初、浜松市市民部文化財課、舞阪 協働センター、浜松商工会議所商業観光課であったが、 取材をきっかけに、多くの組織から協力を得られた。

5. 今後の活動

今後は、任意団体として浜松鈴鈴の出版事業を継続 し、さらに深く地域文化に入り込み、活動を大学のメ ディア部として活動を広げていく。

さらに、「平成28年度みんなのはままつ創造プロジェクト」に採択されたのを機に、組織の取材力を生かして、地域と協力して、浜松における伝統的なお祭りのアーカイブ化を推し進めていく。

謝辞

事業のきっかけを与えてくれた、浜松市市民部文化 財課の皆様に感謝します。出版の専門的な指導と的確 な校閲をいただいた鈴木厚夫氏に感謝します。また、 取材や配布にご協力いただいた皆様に感謝の意を表し ます。

報道関係

・西尾, 野口: NHK 静岡局「たっぷり静岡~キラキラしずおか人」、2016年1月19日放送

表 1: 浜松鈴鈴 発行内容

号数	表紙	表 T : ※	取材先	担当者
320		・出張浜松おまつり暦:		【取材・記事】
	浜松鈴鈴 "**	 松尾神社大祭	・遠州はまきた飛竜まつり	鈴木美咲、西尾、野口、
		 ・出張浜松おまつり暦:		江崎、深澤
	- 建康	遠州はまきた飛竜まつり		【レイアウト】
第1号	たない。	・家康公あしあとプチツ		鈴木祥子
מיים	3	アー:家康公の歴史を歩		【表紙】
	水L58的5种90欧加: 松尾神社例人祭	ノー・家康五の歴史で多 く		西尾、野口
	WERKERIO !			【Web 更新】
	nttp://www.nama_rms.into(pt)			鈴木美咲
	2015/7/31	 ・出張浜松おまつり暦:		 【取材・記事】
	浜松鈴鈴		・浜松城	鈴木美咲、西尾、野口、
	10217 VAZZY DITERIT TORONO STREET	・家康公あしあとプチツ		深澤
	分章 洗達 洗達			【レイアウト】
// O	" 广	アー:太刀洗池/片身の	・1左 鳴 湖 	鈴木祥子
第2号		池		【表紙】
	7 7			西尾
	ホラーな お様2本立て! 家場公にまつわる前しい伝説			【Web 更新】
	もちろん、関係を確認のイメージをとくらませる私に対しまわりませた。 機会関連でくるもの人のと、例とも私に対象が特別をデーマーで、 関連が編しい事態に、別してなる17ちまっともステリアスを記載を関わします。			鈴木美咲
	2015/9/8			
	连松鈴鈴	・出張浜松おまつり暦:		【取材・記事】
	३६३ १) १४८ र र वा महावित (ब्रह्म) हाएस)		・浦川歌舞伎	鈴木美咲、西尾、野口、
	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	・出張浜松おまつり暦:	・浜松市博物館	鈴木祥子、堀口 【レイアウト】
		浦川歌舞伎		江崎
第3号		・家康公あしあとプチツ		【表紙】
	TO THE PARTY OF TH	アー:浜松市博物館特別		西尾
		展		【Web 更新】
	取用数例は、四級信仰や公司目をしている人のなか。役者から私、作品をおした。 して、今年日からから下向」がは数目にで、今日は、海地の大に出るさしている日は数目のうち、研究(地区の文でははくわけませいが、日は使物日と「日は日本時日」と同じは表別した。日に可以から私となりをおりまたがなり。			鈴木美咲
	2015/11/8			
	F #/\fAfA	・出張浜松おまつり暦:	・舞阪大太鼓まつり	【取材・記事】
	第15 20-22 PERSON (1987)	舞阪大太鼓まつり	・龍潭寺	西尾、野口、村井
	作業を ・ 大郷。 ・ 大 ・ 大 ・ 大 ・ 大 ・ 大 ・ 大 ・ 大 ・ 大	・家康公あしあとプチツ		【レイアウト】
	(A)	アー:龍潭寺		江崎
第4号	杂。			表紙】
				西尾 【Web 更新】
	2 III A STATE OF SHARE OF STATE OF STAT			【Web 史和】 鈴木美咲
	すっています。 マー・マー・マー・マー・マー・マー・マー・マー・マー・マー・マー・マー・マー・マ			如小大吹
	2016/1/8			
	AUAUCAAD	・出張浜松おまつり暦:	・西浦の田楽	【取材・記事】
	洪松峁峁	西浦の田楽	・鈴木厚夫氏	西尾、野口、村井、権田、
	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	・家康公あしあとプチツ	 ・浜松市役所産業部観光・	深津
	S Constant of the second of th	アー:曳馬城	シティプロモーション課	【レイアウト】
第5号	東京の一位		・曳馬城	鈴木祥子
	を			【表紙】
				西尾 (Mob 更新)
	DEODY RC (POLISHE) ウムルロールセ の作るもの地位できなどのできながあった。 100-8010 (ORGE) く ARM COLORA と マイ、 PMC (PMC) (ARM COLORA EMPOSITE とし、 PRESENTATION AC です。 PMC (PMC) (ARM COLORA (PMC) RT (PMC) RT (PMC) (PMC) (PMC) (PMC) (RMC) (RACE (PMC) RT (PMC) (PMC) (PMC) (PMC) (PMC) (PMC) (RACE (PMC) RT (PMC)			【Web 更新】 ☆★美兴
	0010/0/10			鈴木美咲
	2016/3/18			

静岡県西部地域の農業活性化に向けたサポート事業



田中 宏和 | 情報学部教授 田中宏和研究室

1. はじめに

静岡県は全国でも有数の農業が盛んな地域である。 TPP(環太平洋連携協定)が実施されると外国から の安い農産物の流入による、農家への影響が心配され る。その一方で、大都市への人口集中と地方の人口減 少による過疎化は大きな社会問題になっている。

農業は地域の社会資本であり、地域活性という面でも農業が注目され始めている。本プロジェクトでは浜松地域の農家が集まり、六次産業に取り組もうとしている NPO「百姓のチカラ」と連携し、農業の六次産業化に向けたプロジェクトを推進してきた。

零細農家が成功するには、大手資本との価格競争に 負けないビジネスモデルをつくること、また六次産業 のプロセスにおいて、流通主導ではなく、生産者主導 の価値づくりが欠かせない。本プロジェクトは零細農 家が六次産業に取り組む際の課題と具体的な方策を明 らかにする。

2. プロジェクトの概要

今回のプロジェクトでは、「NPO 百姓のチカラ」の問題点をワークショップで明らかにするところから始めた。ワークショップでは事前に実施した個別アンケートの集計結果を紹介した後、3班に分かれてブレーンストーミングを行った。学生はそれぞれの班の討議をまとめていくファシリテータの役割を担った。どの班の議論も「NPO の目的は何か、活動方針が不明確になっている」という共通の問題点が浮き彫りにされた。NPO 設立当初と比べて組織の求心力が弱まっている点が指摘されその原因について本音で議論することができた。

ワークショップのあと学生たちで連関図を使って問題点を整理し解決の方向性を検討した。検討した結果はNPOの定例会で紹介し、2つの課題解決の方向性について提案した。ひとつはNPOの農家間の情報共有を図り、組織の求心力を高める方策である。もうひとつは、地域とのつながりをベースに新たなビジネスモデルを開発し販売戦略を推進していく方策である。なお、付随的に現在行っている展示即売会に焦点をあ

て、準備業務と終了後の業務を削減すると共に蓄積されたデータを有効に活用する仕組みも提案した。われわれが開発したシステムは、①情報共有システム、②Web販売システム、③簡易POSレジシステムの3つである。システム開発のスキルは勉学しながらスキルを習得し、分担して開発にあたった。



図 1 第 1 回ワークショップの様子

3. Web 販売システムの需要調査

NPOの強みは、地域とのつながりと農家が生産する農産物が多岐にわたっている点である。これらの強みをもとに、地域在住の消費者と浜松市に縁のある人々を対象に地元の農産物の詰め合わせ商品のネット販売を行うビジネスモデルを考案した。具体的な利用イメージは、地元を離れた学生などにその家族が地元の野菜を仕送りとして送るものである。これを「故郷仕送り便」と名付けた。

「故郷仕送り便」自体がどの程度の需要があるのか を調べるために2回のアンケート調査を実地で行っ た。

①第1回アンケート調査

静岡大学の 大学祭において展示即売会とソーセージ教室のイベント開催を NPO に依頼し、その来場者を対象に対面調査によって実施した。

この調査のねらいは Web 販売の認知度、利用度、利用意欲を把握し、農家からの直接購入において重要視する項目について明らかにすることであった。

約60名の回答結果から、生鮮食品のWeb販売の認知度はおよそ5割であったが、その利用率については

2割弱と低く、「聞いたことがある、知ってはいるものの利用したことはない」という回答が多くあった。また、重要視する項目は、「安さ」「新鮮さ」「安全性」であることがわかった。なお、われわれが想定した宅配サービスについて説明するとおよそ6割が利用してもたいという回答を得た。アンケートによって得られた知見を新しいサービスの要件に盛り込むことにした。

②第2回 アンケート調査

毎年1月にNPOでは遠鉄百貨店で展示即売会を実施している。この機会を利用して「故郷仕送り便」に関するの需要調査を行った。「仕送り便を利用してみたい」と回答した人は約7割となり、今回のアンケートでも故郷仕送り便の需要は見込める結果となった。また、前回のアンケートから得られた需要として3種類のコンセプトの仕送り便を提示した結果、「旬の食品」の詰め合わせの需要が高いこともわかった。

4. 開発したシステムの特徴

(1)情報共有システム



図 2 情報共有システムメニュー画面

図2は情報共 有システムの メニュー画面 である。

情報共有システムでは、NPOに参加している農家の情報を掲載し

情報共有ができるようにした。また、定例会の開催案内、出欠情報の登録、開催後の議事録などを登録できるようにし、会員相互で「旬」な情報を取得できるようにした。また、農家が相互に知らない知識を知っている農家が提供する「会議室」機能も実装しており、相互に農業スキルを高められるようにした。開発にあたっては、NPOの若手農家の協力を得て、学生と農家がSkypeで議論し合いながらシステムを段階的に開発した。

(2)Web 販売システム

図3はWeb販売システムの画面である。

Web 販売システムではホームページ上に掲載した商品を登録した会員顧客がクリックすることで購入できる仕組みになっている。その特徴は、商品は各農家の農産物の詰め合わせであるため、注文後に農家ごとに

注文を振り分ける機能があること、および詰め合わせ 場所に農家が持ち込んだ後、完了報告を行うので、詰 め合わせ商品の準備状況を閲覧できるようにしている 点である。



図3 Web 販売システム (左が管理者用、右が顧客用)

(3) 簡易 POS レジシステム

図 4 は簡易 POS レジシステムのメニュー画面である。 展示即売会などを行うときに販売データの集計と売れ 残った商品数の把握を行うのが「簡易 POS レジシス



図 4 簡易 POS レジシステムのメニュー画面

幅に削減することが期待できる。なお、本システムの 開発の一部は浜松情報専門学校の卒業制作の一環とし て共同で行った。

5. おわりに

零細農家が集まって六次産業を展開するのは十分に可能である。そのポイントは、①農家が団結すること、②地域とのつながりと商品特性を生かし、「縁」をベースにした販売戦略が有効であること、③ITを活用して業務を効率化すると共にデータの有効活用を図る仕組みを作り上げることであることがわかった。今回のプロジェクトは限られた短い期間ではあったがその第一歩を確実に踏み出すことができた。この成果を静岡県下の農家の方々に広く情報発信していきたい。

今回のプロジェクトに全面的にご協力いただいた NPO 百姓のチカラ代表鈴木さまに感謝申し上げます。

発 行 日 平成28年3月

発 行 国立大学法人静岡大学 イノベーション社会連携推進機構 地域連携生涯学習部門

編 集 鈴木 貴晴 | 静岡大学学術情報部研究協力課社会連携係

連絡先 〒422-8529 静岡市駿河区大谷836 静岡大学イノベーション社会連携推進機構

☎054-238-4056 E-mail syakai-renkei@adb.shizuoka.ac.jp

ウェブサイト http://www.lc.shizuoka.ac.jp/

※ 新聞記事は、静岡新聞社の許諾を得て転載しています。